

# 予備教育におけるアカデミック・ジャパニーズに関する一考察

嶋田和子

イーストウエスト日本語学校

## 要旨

2000年8月「日本の大学等での勉学に対応できる日本語力（アカデミック・ジャパニーズ）を測定する」ことを目的とする日本留学試験が発表されたが、アカデミック・ジャパニーズという言葉は、明確な定義づけがなされぬままであった。

一方日本留学試験が実施されて3年目を迎えた現在、日本語学校における予備教育はさまざまな形で試験対応策が取られている。しかし、単なる試験対策授業ではなく、日本留学試験が測定対象とするアカデミック・ジャパニーズ育成を可能にする授業活動であることが重要である。

本稿においては、日本語学校の教師を対象とした「アカデミック・ジャパニーズに関するアンケート調査」の結果を報告し、予備教育現場でのアカデミック・ジャパニーズの捉え方、さらには予備教育における授業活動のあり方について論述する。

【キーワード】 予備教育、日本留学試験、アカデミック・ジャパニーズ、課題達成能力

## 1 はじめに

財団法人日本語教育振興協会では、協会が認定している日本語学校の実態を把握すべく「日本語教育機関実態調査」を毎年実施している。その調査結果によると、卒業生の進路は、ここ十年間変わることなく進学者が6割を占め、平成15年度調査では、進学者は68.6%となっている(1)。日本語学校において予備教育としての日本語学習は、重要課題の一つである。

2002年6月に大学進学者のための試験として日本留学試験が新たに始まったが、それまでは日本語能力試験が大学入学のための日本語力を測る試験として援用されてきた。そのため多くの日本語学校では、日本語能力試験への対応を余儀なくされ、文字・語彙・文法・読解・聴解という分野別の試験対策授業を実施し、知識偏重が問題視されていた。日本語能力試験における高得点の学習者が、進学後大学での勉学に対応できる日本語力が不十分なため、支障をきたすという問題が生じていたのである(2)。

新たに始まった日本留学試験が測定対象としている能力は、日本語の知識の多寡ではなく、日本語を使ってどのような課題が達成できるかという総合的なコミュニケーション能力である。「日本の大学での勉学に対応できる日本語力（アカデミック・ジャパニーズ）をどの程度習得しているかをシングルスケールで測定することを目的とする」新試験の実施は、予備教育を行う日本語学校現場にも新たな展開の可能性を生んだ。

しかし、日本留学試験が求めているアカデミック・ジャパニーズとは何か、そのために予備教育の現場ではどのように対応すべきかを考えなければ、単なる試験のための傾向と対策授業に陥ってしまう恐れがある。門倉（2003）は、アカデミック・ジャパニーズについて共通理解がないことが最大の問題であり、基本的な共通理解を構築していくことこそが重要な課題であると述べている。日本留学試験導入によって提示されたアカデミック・ジャパニーズは、十分な共通認識が得られないまま、それぞれの現場で使われ始めた。試

験である以上何らかの対応は必要であるが、日本留学試験での高得点獲得を目指し、傾向と対策的な授業に走ったのでは、真の意味での予備教育を実施しているとは言えない。そこで、現場ではどのようにアカデミック・ジャパニーズを定義しているのか。また予備教育としてどのようにアカデミック・ジャパニーズの養成を考えていくことが肝要なのかを考察していくこととする。

## 2 大学での勉学に求められる日本語能力

### 2-1 日本語教育振興協会プロジェクトが考える課題達成能力

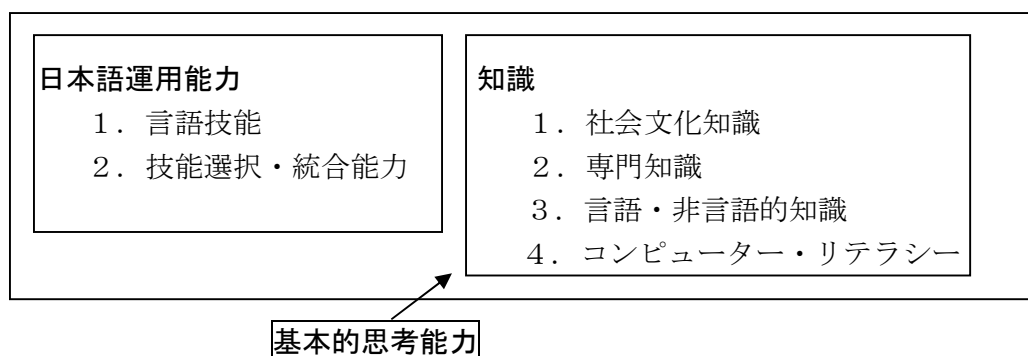
日本語教育振興協会による基礎日本語能力研究プロジェクトでは、大学の学業、学園生活の場面・トピックから、実際に遭遇する課題を列挙し、次にその課題を達成するために必要な技能・知識の抽出を行った。初年度である 1999 年度は、1.基本的思考能力、2.能力操作能力、3.学業日本語運用能力、4.自立能力、5.学園情報獲得能力の5つを大項目とし、基本的思考能力は他の4つを支える能力として、それぞれに以下のごとく中項目を立てた。

1. 基本的思考能力
2. 能力操作能力            課題分析能力、能力行使能力、モニター能力
3. 学業日本語運用能力    語彙的知識運用能力、文脈構成能力、  
場面に応じた言語形式の使い分け能力
4. 自立能力                補い能力、学習ストラテジー能力、社会適応能力
5. 学園情報獲得能力      履修情報獲得能力、学業支援サービス情報獲得能力、  
学生生活情報獲得能力

これは継続研究であり、翌 2000 年度の研究活動においては、大学で求められる日本語能力である課題達成能力に関して考察した。

表 1 課題達成のための能力

(「運用能力獲得のための基礎日本語教育」 p.15)



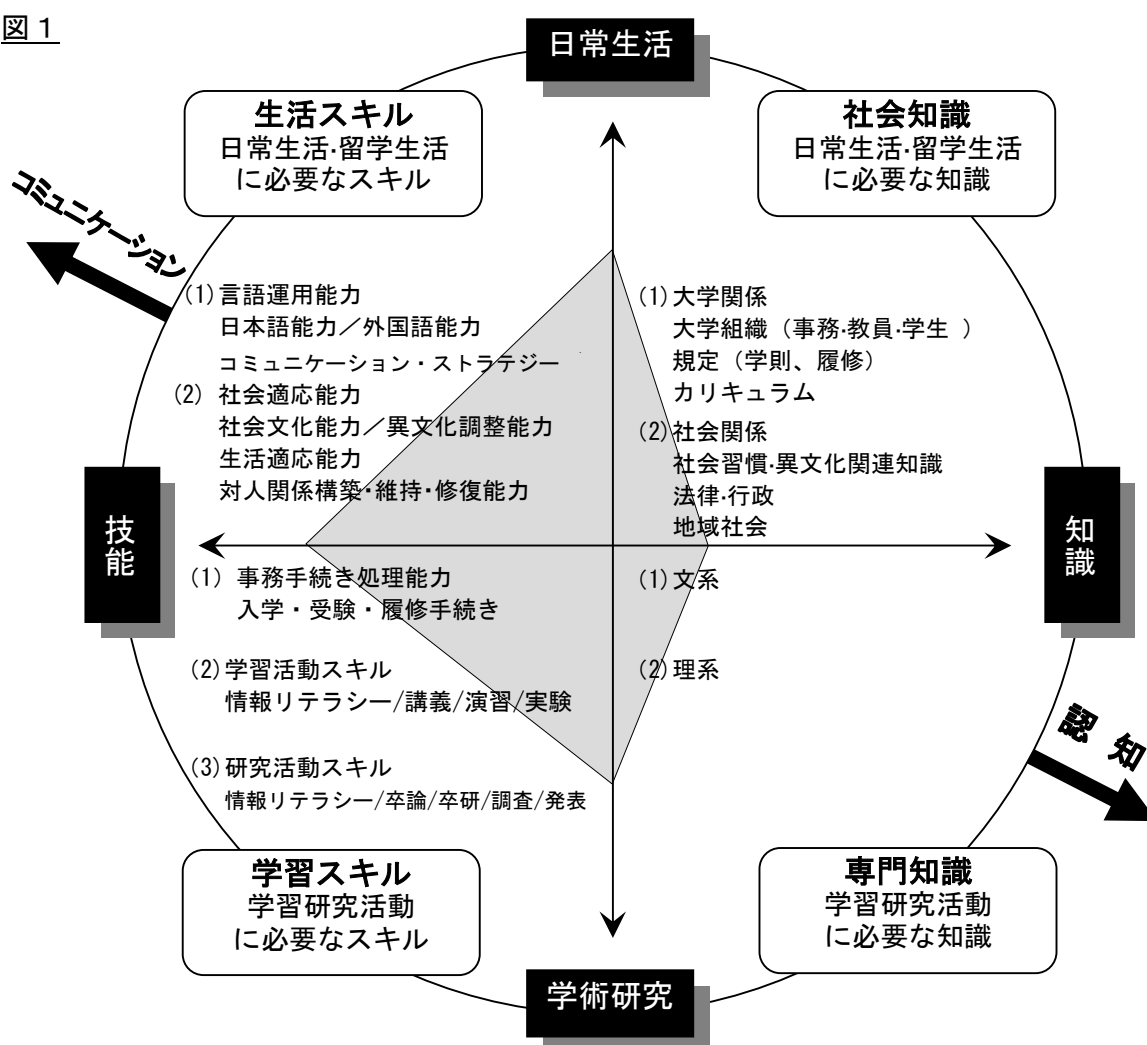
### 2-2 日本留学試験における課題達成能力

「日本留学のための新たな試験」に関して調査研究協力者会議により 2000 年 8 月に報告書が出され、以下のような概念図が示された。その測定対象能力は、図 1 の概念図の網掛け部分であり、この試験は「日本での留学生活を送る上で、日本語によるコミュニケーション能力があるかどうか、また、自国での初等・中等教育修了までに習得した

知識を前提としながら、日本の大学で学習・研究活動を行うための日本語能力があるかを測定する言語テストであり、かつ標準テストである」としている。

また、課題とは「日本に留学するにあたって、あるいは、日本の大学に入学後に直面する現実的な諸課題の総称」としている。この課題達成のために求められる言語技能を、聞く、話す、読む、書く、翻訳する、と5分類し、さらに下位技能として、1.情報の全体の流れをとらえる、2.情報の全体を、ある判断や評価をしながらとらえる、3.特定の情報を抽出してとらえる、4.推測しながら情報をとらえる、5.予測しながら情報をとらえる、という5類型にまとめている。このように日本留学試験においては文字・語彙・文法等の知識の多寡を問うのではなく、日本語を使って何が出来るかを測定しようとしているのである。

図 1



図表の比較からも明らかなように、日本語教育振興協会プロジェクトの考える課題達成能力と、日本留学試験が求める日本語力すなわちアカデミック・ジャパニーズとは、類似した考え方であることが分かった。課題達成という概念は、両者に共通する概念であり、日本語学校現場では、その課題達成能力をいかにして日々の教室活動の中で育成していくかということが、その後の実践における大きな教育課題となったのである。

### 3 アカデミック・ジャパニーズのさまざまな定義

日本留学試験の目的は、「外国人留学生として日本の高等教育機関、特に大学学部に留学を希望する者が、日本の大学での勉学に対応できる日本語力（アカデミック・ジャパニーズ）をどの程度習得しているかをシングルスケールで測定すること」であるとしている。しかし、このアカデミック・ジャパニーズに関する定義は明確ではなく、その後さまざまな使われ方をしてきた。

2004年11月に東京外国語大学で行われた「アカデミック・ジャパニーズを考えるシンポジウム」において4名のパネリストが次のようなアカデミック・ジャパニーズの定義を示した。

横田淳子氏（東京外国語大学）「大学での授業に密接に結びついた日本語、またはその日本語力」、佐藤政光氏（明治大学）「アカデミック・ジャパニーズとは、学部の教養教育が目指す内容（論理力、判断力、表現力）が日本語によって実現されること、山本富美子氏（立命館アジア太平洋大学）「大学・大学院等での学術分野のみならず、卒業後の職業生活や社会生活で営まれる知的活動を通して使用される高度な日本語」、松本隆氏（アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター）「学術的日本語運用能力あるいは、日本語を用いた学術的相互交渉能力」と、4人のパネリスト間でも、アカデミック・ジャパニーズに関する解釈はさまざまであった。

アカデミックの捉え方として、アカデミックな分野すなわち学術分野という捉え方、アカデミックな話題・テーマという捉え方もあれば、アカデミックな活動を可能にする力とする考え方もある。

では、日本留学試験がいうアカデミック・ジャパニーズとは何か。本稿においては日本の大学等で学び、学園生活を送るにあたって必要とされる日本語力であり、それは論理力、分析力、判断力等の基本的思考能力を含むものとする。日本留学試験においては、知識そのものではなく、論理の流れが分かるかどうか、提示された課題をいかにして達成できるかを問うことを主眼としている。もちろんそれは基本的な知識に裏づけされたものであることは言うまでもない。しかし、現実には、そこで扱われている語彙の難易度、抽象度、テーマがいかに学術的であるかといった点が強調され、課題達成という観点が薄くなりがちである。そのことが、予備教育現場で知識面に偏った日本留学試験対策が行われることにつながると考えられる。だからこそ日本留学試験が求めているアカデミック・ジャパニーズの明確化が重要だと言える。

では、実際にそれぞれの日本語学校の現場教師はどのようにアカデミック・ジャパニーズを考え、日本留学試験に対応した授業を行っているのだろうか。実態把握を目的としてアンケート調査を実施した。

### 4. 日本語学校におけるアカデミック・ジャパニーズに関する意識調査

調査対象：日本語学校に勤務する日本語教師 102名（34校）

調査方法：2004年11月にアンケート調査を実施した。

調査項目：調査項目は以下の5項目である。

- ①試験が実施されるようになって、授業内容は変わったか。
- ②アカデミック・ジャパニーズをどのように定義するか。

- ③日本留学試験対策授業はアカデミック・ジャパニーズの養成につながっているか。
- ④日本語学校でアカデミック・ジャパニーズの養成にどう取り組んでいるか。
- ⑤アカデミック・ジャパニーズに関する自由な意見

調査結果：

### ① 日本留学試験による授業内容の変化

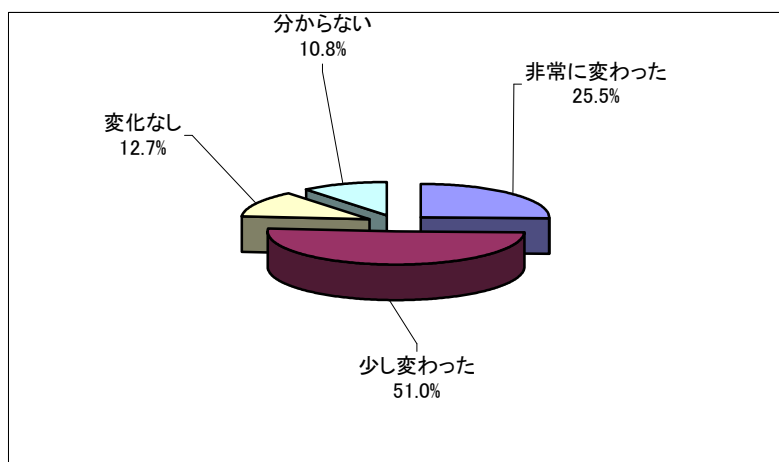
日本留学試験が実施されるようになって、授業内容が変わったかという質問に対して「非常に変わった」が26人、25.5%、「少し変わった」は52人、51.0%、合わせて76%の教師が授業内容は変わったとしている。変化なしという回答は13人、12.7%、分からないは11人、10.8%であった。

次にその理由をあげてもらったが、「非常に変わった」理由としては、「カリキュラム変更」「1年を通して試験対策授業実施（日本語能力試験と2回の日本留学試験）」「聴解教育の重視」「主教材の変更」などがある。主教材変更に関しては、エッセイ的なものを減らし、説明文、論説文を増やすといった対応、また総合科目対策ではなく日本語の授業の中に歴史・地理・社会等を含めるようになったという説明があった。理由の記述において、「1年を通して対策授業に追われることへの疑問、カリキュラム変更に戸惑いを感じる」という回答が6件あった。

また、「少し変わった」理由としては「速読重視」「聴解教育の重視」「スキミング・スキヤニング指導の強化」「論理的な表現への指導強化」「キャンパス語彙の導入」などが見られた。また、初級後半からスキミング・スキヤニングを念頭に置いた指導を行う必要性や、論理的な意見文を指導する時間の増加なども挙げられており、課題達成能力の育成のための教育実践をめざしたいという現場の意図が見られた。しかし、「少し変化した」が過半数ということは、まだまだその方向性が定着したものではなかったり、学校全体としての動きではないといったことが考えられる。

「変化なし」の理由としては、そもそも基本的に読み書き能力がある者が高得点を取れる試験であることから、特別な対策をせずとも平常の授業の中で十分に指導が可能であるという意見があった。また、同様にこれまでも日本留学試験が測定しようとしている能力を考えて教育実践をしているという理由もあげられていた。

**グラフ1** 【日本留学試験が実施されるようになって、授業内容は変わりましたか。】



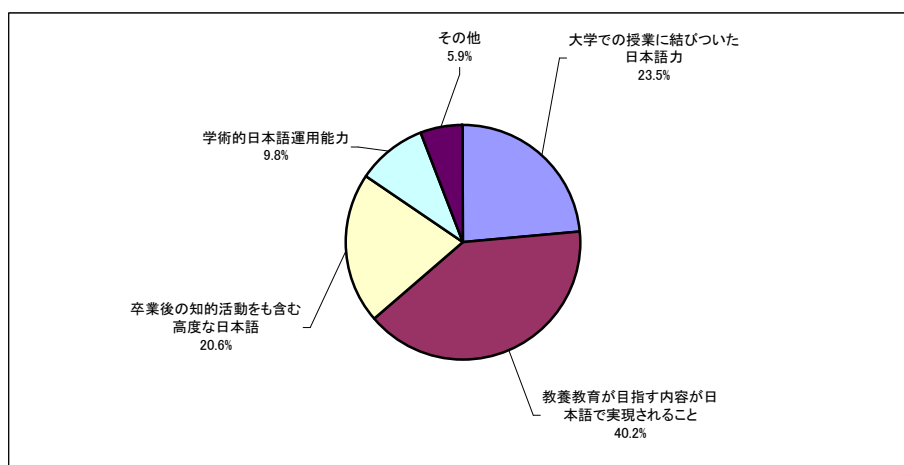
## ② アカデミック・ジャパニーズの定義

次に3で述べた東京外国語大学で行われた4氏の定義を参考資料として載せ、どの考え方に近いかを聞いた。その結果、「教養教育が目指す内容（論理力、判断力、表現力）が日本語によって表現されること」という意見が41人、40.2%と最も多かった。続いて「大学での授業に結びついた日本語力」24人、23.5%、「卒業後の知的活動をも含む高度な日本語」21人、20.6%と続いた。アカデミック・ジャパニーズを大学での勉学に必要な日本語力に限定するのではなく、その後の社会生活での知的活動までも含む広義の解釈が全体の2割を占めたことは興味深い結果であった。その理由として「日本留学試験の出題傾向からそう考えた」「大学進学者にだけ求められる能力ではない」ことが複数の教師の回答に見られた。

「学術的日本語運用能力」とする意見は、10人、9.8%であった。また、その他は6人、5.9%であり、アカデミック・ジャパニーズとは、「大学生活で支障をきたさないための日常会話である」「大学進学のための手段であり、傾向と対策的な授業をすることで実力を伸ばすことができる」という意見も見られた。

また自由記述によって、「大学での授業に結びついた日本語力」と回答したものの、その根底に佐藤氏のあげる論理力、判断力を含むと捉えていることが示されている回答が4件あった。

**グラフ2** 【アカデミック・ジャパニーズをどう考えますか。】



## ③ 試験対策とアカデミック・ジャパニーズ養成

日本留学試験対策授業はアカデミック・ジャパニーズの養成につながっているかという質問に対して「養成につながる」は僅か4人、3.9%であった。その理由としては、「試験がアカデミック・ジャパニーズを測定しようというのだから、試験対策授業はすなわちアカデミック・ジャパニーズ養成になっているはず」とする意見が2件あった。「少し養成につながっている」とする意見は、68人、66.7%である。その理由がさまざま述べられているので、参考として列挙する。

### 【能力全体】

- ・ アカデミック・ジャパニーズは試験対策する性質のものではない。

- ・ もともと学習者が持っている能力である。
- ・ 聴読解の授業をするが、この能力は学習者がもともと持っている能力による。

【授業内容】

- ・ 文法・語彙知識だけではなく総合的な理解力や論理力をつける授業をしている。
- ・ 語彙の獲得という点で考えれば、意味がある。
- ・ 論理的な文章を書く指導が増えた。
- ・ 授業が過去問題をひたすら解くという授業に傾斜している。
- ・ アカデミックなテーマ・問題を取り扱っている。

【問題点】

- ・ 日本留学試験は、アカデミック・ジャパニーズを測っていない。
- ・ 日本留学試験はアカデミック・ジャパニーズのごく一部を測定しているだけ。
- ・ アカデミック・ジャパニーズとの関連は殆どない。

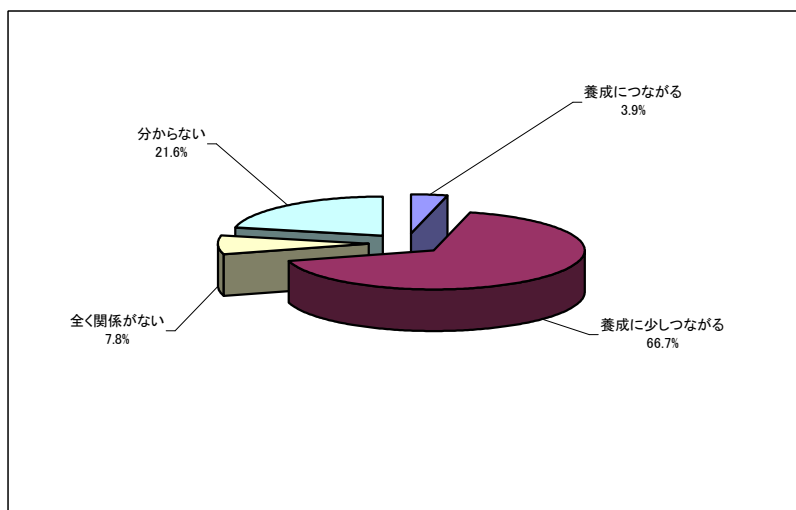
【その他】

- ・ 日本留学試験が本当にアカデミック・ジャパニーズを測定しているか、受け入れ側の大学がもっと考える必要がある。
- ・ アカデミック・ジャパニーズの養成をめざした授業は、教師の力量によるところが大きい。

全く関係がないという意見は、8人、7.8%であった。その理由としては、「日本留学試験は直接的にアカデミック・ジャパニーズとは結びつかない」「日本留学試験は対策授業が出来るようなものであってはいけない」という理由が挙げられた。また、「分からない」とする回答も22人、21.6%あった。

アンケート結果から、多くの日本語学校で日本留学試験対策を行っているものの、それがアカデミック・ジャパニーズの養成に十分に繋がっているとは考えられていない実態が分かった。これは、アカデミック・ジャパニーズをどう定義するかによっても意見は分かれるが、日本留学試験の内容、日本語学校における対策授業のあり方など、検討されるべき点は多々あると考える。

**グラフ3** 【日本留学試験対策授業は、アカデミック・ジャパニーズの養成につながっていますか。】



#### ④アカデミック・ジャパニーズ養成に関する取り組み

日本語学校でアカデミック・ジャパニーズの養成にどう取り組んでいるかについての回答は自由記述で行ったが、その結果は多岐にわたるものであった。大学進学後の日本語と狭く捉えることなく、総合的な日本語として取り組んでいるとする意見もあったが、全体としては、日本留学試験対策が即アカデミック・ジャパニーズの養成への取り組みのような回答が多く見られた。「記述に関しての具体的な技術指導、実践練習をしている」「聴解、聴読解は過去問題を出来るだけ数多くやらせる」「日本留学試験がアカデミック・ジャパニーズを測ると述べているのだから、その対策をやることに意味がある」という理由が述べられている。

1月～3月の最後の学期を使用して、スピーチ、プレゼンテーションを多くしたり、レポート作成に時間を割くという例も多く見られた。しかし、個々の教師が取り組んでいるにしても、まだ学校全体として検討をしたり、取り組むという態勢にはないという傾向が見られた。現段階では核教師に任せられている状況であり、日本語学校側の柔軟な対応が望まれる。

#### ⑤アカデミック・ジャパニーズに関する意見

アカデミック・ジャパニーズに関する自由な意見を最後に述べてもらった。以下にその意見をあげることとする。

##### 【授業内容】

- ・ 矛盾のある文章を与え、その中の矛盾を見つけて発表する、文章化するという授業はアカデミック・ジャパニーズ養成に役に立つ。
- ・ 日本語で論理的に考え、表現できるようになることを最終目標にしているので、アカデミック・ジャパニーズについて特に考える必要はない。
- ・ テーマの選択が現場の課題である。
- ・ アカデミック・ジャパニーズにも、基本的な文型の獲得が重要であるが、それが軽視されている。

##### 【日本留学試験】

- ・ 実際の日本留学試験でアカデミック・ジャパニーズが測れているとは言えない。
- ・ 要領の良さもアカデミック・ジャパニーズの一部だとは思いますが、じっくり考えることがおろそかになるような問題が多すぎる。
- ・ キャンパス内のつまらない、レベルの低い話題に偏りすぎている。読解も内容に欠ける。
- ・ 短文の読解問題だけでは、大学で要求される読解力は測れない。
- ・ 記述問題にバリエーションがない。要約文を書かせるなどの工夫が必要である。
- ・ 記述問題も論理的思考が測れておらず、技術的な面が強調されている。
- ・ 日本語能力試験のほうが、内容的にずっと良い。聴解や文法を改善してこれまでのように大学受験には日本語能力試験を利用したほうがよい。

##### 【問題点】

- ・ 思考能力や論理能力をどう育てていけばよいのか、分からない。
- ・ アカデミック・ジャパニーズが一人歩きしている。明確な定義が必要だと思う。



- ・ 市販のテキストが、アカデミック・ジャパニーズは大学内で遭遇する日本語のように思わせる内容になっている。
- ・ 大学入学後に獲得すべきアカデミック・ジャパニーズと、日本語学校で育成すべきアカデミック・ジャパニーズの混同が起こっている。
- ・ 日本語学校がオリエンテーションの一部を担っているような感じの対策授業となっている。

#### 【制度面】

- ・ 試験結果の利用を、専門学校などにも広く活用する方法を考える必要がある。
- ・ 中国で実施できないことが問題。この現実こそが、最も重要な問題を内包しているのではないか。

#### 【その他】

- ・ アカデミック・ジャパニーズという考え方は、日本語教師の成長に役立つ。
- ・ アカデミック・ジャパニーズということについて、これまで考えてこなかった。アンケート調査は勉強になった。
- ・ 教師養成の段階で、アカデミック・ジャパニーズを一切視野に入れていないが、その点を改善すべきだと思う。
- ・ 日本の高校3年生、大学1年生のアカデミック・ジャパニーズ能力を知りたい。そのために日本留学試験を実施して、データを是非取りたい。
- ・ ととて日本人学生にアカデミック・ジャパニーズがあるとは思えない。学部1年で配慮した授業を展開していく必要があるのではないか。

日本語学校現場では、「日本留学試験実施要項」における以下のような記述も、アカデミック・ジャパニーズの明確化を妨げる要因になっているのではないかという指摘がある。

出題科目表には、日本語科目の試験は日本語の力を問うものであり、総合科目において思考力、論理的能力を問うのだ書かれている。日本語学校におけるテクニックに偏った日本留学試験対策カリキュラムが生まれるのは、このあたりに原因があるのではないかという意見が複数寄せられた。こういった点も、今後改善されることを望む。

表2 出題科目等

科目	目的	時間	得点範囲
日本語	日本の大学等での勉学に対応できる日本語力(アカデミック・ジャパニーズ)を測定する。	120分	0~400点
理科	日本の大学等の理系学部での勉学に必要な理科(物理・化学・生物)の基礎的な学力を測定する。	80分	0~200点
総合科目	日本の大学等での勉学に必要な文系の基礎的な学力、 <b>特に思考力、論理的能力を測定する。</b>	80分	0~200点
数学	日本の大学等での勉学に必要な数学の基礎的な学力を測定する。	80分	0~200点

## 5. 予備教育におけるアカデミック・ジャパニーズの獲得

日本語学校では日本留学試験にどう対応していけばよいのか、実際にどのように教育実践がなされればよいのかについて考えていくこととする。

日本語教育振興協会が2004年度実施したアンケート調査(3)によると、殆どの日本語学校現場で対策授業を実施しているという結果が出た。

【日本語科目の対策授業を行っているか】(調査に回答した学校数：299校)

- a. 通常授業内で行っている 271校
- b. 特別授業として行っている 24校
- c. 対策を行っていない 19校 (※a bの複数回答あり)

日本留学試験の実施によってこれまで日本語能力試験に照準を当てていたものが、年3回(日本語能力試験12月、日本留学試験6月&11月)の試験対策授業となり、1年を通して試験対策に追われる結果となったという意見も見られた。また、日本留学試験対策が実際に学習者のアカデミック・ジャパニーズの能力を育成しているのかという疑問の声もあがっている。それは、日本語学校関係者が、日本留学試験が測定しようとしている能力を明確に理解しておらず、ただ対策に走っているためと考えられる。試験である以上、何らかの対応策は必要である。しかし、単に傾向と対策的な授業に走ることだけは避けるべきであると考ええる。

アカデミック・ジャパニーズの育成にあたっては、1. 速読の重視、2. 速聴の重視、3. 論理的能力を重視した作文教育、4. 書くことと話すことの連携と違いの意識化、5. 語彙知識と予測・推測能力、6. 技能統合をめざした教育、7. 批判的思考の7つの点が重要であると考えるが、紙面の関係で項目をあげるにとどめる。

また、日本語学校においてアカデミック・ジャパニーズ養成を考える際に、中級・上級になってから実施するというのではなく、初級の段階から考えることの重要性をあげておきたい。教師は初級から論理力、判断力、表現力が養えるような教授活動を考えることが求められる。初級は文型を導入、練習、それが使えるようになることが重要課題ではあるが、体系的に中級、上級へとつなげていくことが重要である。

次に、課題達成能力を育成するためのシラバス例をあげる。日本語能力試験の出題基準のような文字語彙・文法の項目を積み上げていくという考え方ではなく、どう運用能力をつけていくかを一つの流れで考察したものである。日本語学校の現場において忘れられがちなのが、全体把握力である。到達目標がどこで、その過程においてどのようなことが求められているのか。今、全体の流れのどこに位置するのか。こういった考え方に基づいて予備教育を行えば、いわゆる試験のための「傾向と対策」といった小手先の授業にはならないのではないだろうか。

表3では左側に螺旋が描かれている。これは初級、中級、上級といったレベルの枠の中に項目が納まるのではなく、スパイラルに獲得されていくことを示す。なお具体的な教室活動例は、紙面の関係上本稿においては割愛することとする。

表 3 予備教育における課題達成能力養成のシラバス試案

	読む力	聞く力	書く力	話す力	技能の統合例
上級	資料文献等を精読し、内容を正確に把握する 必要な情報を素早く読み取る 書かれていないことを推論する トップダウンとボトムアップの読み方を使い分ける 幅広い種類の文章を理解する	表現・内容の複雑な文を聞き取る 不意の情報を正確に聞き取る 社会文化的な含みを聞き取る 内容的にも言語的にも複雑な報告、講義等を理解する 多様な話題に関して正確に聞き取る	まとまった量のレポートを書く 論拠を挙げて意見を書く 要点の箇条書きから文脈のある文章を作成する 資料を見ながら、自分の意見をまとめる 多様な話題に関して表現・語彙を選び詳細に書く	調べたテーマを発表する 論理的に意見を述べる 場に応じて適切に相手に伝える 的確に質問をする 幅広い会話のストラテジーを使って話をする	資料に基づきレポートをまとめ、それを発表する。 授業を聞きながらノートを取る 記事等を読み意見を書く 相手の意見を聞き要点をまとめ、自分の意見を述べる
中級	ある程度の量を速読し、内容をつかむ 文章の構成を意識する 必要な情報を読み取る 場面・人間関係を推測する	要点を聞き取る 情報を聞き取り、要不要を判断する 多様な指示や説明、報道等を聞き取る 情報の意図を理解する【意見／説明・伝聞等】	適当な量のレポートを書く 要点を書く 文章構成を意識して書く 書き言葉と話し言葉を意識する	説得力のあるスピーチをする 場・相手に応じて話す 複雑でないコミュニケーションタスクを遂行する 要点をまとめて話す	話を聞きながらメモを取り、適切な質問をする 不確かな情報を確認する
初級	短い文章を読んで事実関係を理解する 明確な内部構造がある文を読み要旨を掴む	短く単純な話を聞いてキーワードを聞き取る 既習の内容領域の話を理解する	具体的かつ実際的な話題について書く 自分の考えを簡単に書く	自分の考えを簡単に伝える 必要な情報を伝える	情報を聞いて、メモを取る 聞かれたことに適切に答える

(作成 嶋田)

## 6. まとめと今後の課題

日本語学校では「日本語を使ってどのような課題を達成することができるか」という総合的なコミュニケーション能力の獲得の重要性について理解している。しかし、現実には学習期間は最長 2 年という限られており、大学受験という目的の学習者に対して、知識偏重になりがちだったことは否めない。

課題達成能力を測定しようとする日本留学試験の実施は、日本語学校現場に根本的な見直しを図る好機となった。

佐藤氏は、前述のシンポジウムにおいて、入学前の予備教育と学部 2 年次までの日本語教育との関係において、予備教育に対して以下のことを期待すると述べている。

1. 生活上のコミュニケーション能力
2. 日本の社会についての一般的知識と理解
3. 話し言葉形式と書き言葉形式についての十分な知識
4. 中級レベルまでのしっかりとした文法能力（特に構文力）

この発表を受けて現場では「この程度のことを大学側は求めているのか」「そんな低い日本語で大学での勉学に十分だと言えるのか」という意見が多く聞かれた。しかし、佐藤氏の言う「しっかりとした文法能力（特に構文力）」とは、日本語能力試験 1 級で高得点を取ることを意味しない。現場では、1 級合格に向けての対策授業を徹底して行うところが多いため、「2 級レベル程度では、あまりにも低い」という声が出てくるのである。果たして、1 級レベルの学習が知識にとどまることなく運用能力となっているのであろうか。知識と運用能力についても再考を要する。

アカデミック・ジャパニーズを「日本の大学等で学び、学園生活を送るために必要な日本語能力であり、それは論理力、分析力、判断力などの基本的思考能力を含むもの」と捉えるならば、断片的な知識の量ではなく、総合的に課題を達成する能力を育成することが重要である。

明らかに日本語学校における予備教育は変化しつつあり、現場教師の意識も変わってきている。しかしながら、日本語教育振興協会のさまざまな協議会などでは、「まだそれぞれの教師が努力するという個人レベルにとどまっており、学校全体の動きになっていない点が問題」という意見が出されている。今後、アカデミック・ジャパニーズの理解を深め、日本留学試験に対応した教室活動のあるべき姿を共に模索していきたいと考える。

しかし、この日本留学試験はそもそも大学入学のための試験である。受け入れ側の大学関係者が現在より一層関心を持ち、共に予備教育について調査・研究をしていくことが重要である。アカデミック・ジャパニーズをはじめ、さまざまな留学生問題をめぐって議論が展開されていくことを望む。

## 注

- (1) 平成 14 年度中に日本語教育機関を修了した 26,908 人のうち 18,463 人が大学等に進学している。進学した 18,463 人の進学先は、4 年制大学が 7,431 人、大学院正規生が 330 人、大学院研究生が 861 人、短期大学が 607 人、専修学校専門課程が 8,904 人などとなっている。-
- (2) 平成 10 年度の文部省補助研究「日本語能力試験と日本語学校教育上の諸問題に関する調査研究」の報告書において、日本語学校での日本語教育が日本語能力試験の存在で大きな影響を受けていることが記されている。「本調査では、日本語能力試験に関して、言語運用能力を測ることが出来ず、知識に偏った試験になっているという指摘がなされた。本来試験がどうであれ、コミュニケーション能力を重視し、理念に則った日本語教育がなされるべきであるが、そこに入試のためのハードルがある以上、それ

を乗り越えさせようとするのも、これまたとうぜんであろう。そのためカリキュラムに影響が出ているという実態が、今回の調査でも明らかになった。」(p.42)

- (3) 日本語教育振興協会では、日本留学試験「日本語」科目を中心とした問題分析及び実施上の問題に関する調査研究プロジェクトを立ち上げ、試験の実施後学習者と教師に対してアンケートを実施している。

## 参考文献

- 基礎日本語教育研究プロジェクト (2000) 『日本語学校生 (就・留学生) のための基礎日本語教育』 日本語教育振興協会
- 基礎日本語教育研究プロジェクト (2001) 『運用能力獲得のための基礎日本語教育—進学希望者を対象として—』
- アジア学生文化協会留学生日本語コース他 2 校共同研究 (1999) 『日本語能力試験と日本語学校教育上の諸問題に関する調査研究—新外国人留学生試験実施に向けて—』
- 「日本留学のための新たな試験」調査研究協力者会議 (2000) 『日本留学のための新たな試験について—渡日前入学許可の実現に向けて—』
- 日本留学試験分析委員会 (2005) 『平成 16 年度第 1 回日本留学試験に関する調査分析』 日本語教育振興協会
- 横田淳子 (2004) 「アカデミック・ジャパニーズを考える」『移転記念シンポジウム：アカデミック・ジャパニーズを考える資料』 東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 佐藤政光 (2004) 「学部教育におけるアカデミック・ジャパニーズを考える」前掲東京外国語大学シンポジウム資料
- 山本富美子 (2004) 「アカデミック・ジャパニーズに求められる能力とは」前掲東京外国語大学シンポジウム資料
- 松本隆 (2004) 「アカデミック・ジャパニーズを考える」前掲東京外国語大学シンポジウム資料
- 門倉正美 (2003) 『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ』平成 14 年度～16 年度科学研究費補助金基盤研究(A)(1)—一般、研究成果中間報告書
- 嶋田和子 (2003) 「課題達成能力の育成をめざした日本語教育振興協会における研究活動—日本留学試験に対応した新たな取り組み—」門倉正美、前掲報告書所収

2004年11月10日

## アカデミック・ジャパニーズに関するアンケート調査

1. 日本留学試験が実施されるようになって、授業内容は変わりましたか。  
非常に変わった    少し変わった    変化なし    分からない
2. 授業内容に変化があった方は、その内容をお書きください。変化がない場合も、その理由をお書きください。
3. アカデミック・ジャパニーズ（以下A Jとする）は「日本の大学等での勉学に対応できる日本語力」と日本留学試験において定義されてきています。しかし、日本語教育現場では、A Jについてさまざまな捉え方がされています。皆さんは、どうお考えでしょうか。2004年11月6日に東京外国語大学で行われた「アカデミック・ジャパニーズを考える」シンポジウムでは以下のような意見が出されました。どの意見に近いからお選びいただき、さらに皆様のお考えをお書きください。
  - 1 大学での授業に密着に結びついた日本語、またはその日本語力（横田淳子氏 東京外国語大学）
  - 2 A Jとは、学部の教養教育が目指す内容（論理力、判断力、表現力）が日本語によって実現されること（佐藤政光氏 明治大学）
  - 3 大学・大学院等での学術分野のみならず、卒業後の職業生活や社会生活で営まれる知的活動を通して使用される高度な日本語（山本富美子 立命館アジア太平洋大学）
  - 4 学術的日本語運用能力あるいは、日本語を用いた学術的相互交渉能力（松本隆 アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター）
  - 5 その他  

具体的な意見：
---------
4. 日本留学試験対策授業はアカデミック・ジャパニーズ（A J）の養成につながっているとお考えですか。  
A Jの養成につながる    A Jの養成に少しつながる    全く関係がない    分からない  
理由をお書きください。
5. 日本語学校でアカデミック・ジャパニーズの養成に対してどう取り組んでいらっしゃいますか。
6. その他、アカデミック・ジャパニーズに関して自由にご意見をお書きください。